卒業後に生かせるスキルアップ

～対人コミュニケーションスキルの向上を目指す～

愛媛県立松山盲学校　主任寄宿舎指導員　宮部　直人

1　はじめに

本校寄宿舎では、現在15名（男子６名、女子９名）が在籍し、小学部生１名、中学部生２名、高等部生７名、理療科生５名である。年齢は10才～80才と幅広い年齢層となっている。

令和元年から、自立へ向けた生活力の向上を重点テーマとして、寄宿舎全体の共通認識を深めながら実践を重ねてきた。その中で、卒業後の生活を充実させ、社会参加を目指すために必要な知識や技能、コミュニケーション能力を身に付けることを目的とした取組を行った。ここでは、令和３年度から令和４年度までの取組について報告する。

2　対象生徒Ａの実態

（１）学年・性別　中学部３年生　男子（令和５年４月現在）

（２）障がい状況　全盲（網膜芽細胞腫により両眼球摘出のため失明）

（３）入舎歴　小学部１年生で入舎

（４）生活状況
- 日課に沿った基本的な生活習慣は身に付いている。
- 同年代の寄宿舎生がいないため、同じ立場で接することのできる生徒がほとんどいない。
- 自分の好きなことには、熱心に取り組む。
- 学校や寄宿舎に必要な物を準備することや、集会や約束の時間を忘れる。
- 自分の意見を求めたとき、返答に困惑することが多い。
- 他人の意見を尊重し過ぎるため、言動が遠慮がちである。

3　実践内容

男子棟内で、友達、成人生徒や寄宿舎指導員とのコミュニケーションを通して、Ａの表現力や聴く力を育んだ。また、年間のねらいを立て、実態と変容に合わせながら段階的な支援を行った。

	男子棟編成			
	中学部	高等部普通科	高等部理療科	合計
令和３年度	１名	３名	１名	５名
令和４年度	１名	２名	２名	５名

（１）令和３年度（Ａ：中学部１年次）

ア　ねらい

寄宿舎指導員がＡの課題だと思う内容をＡと共有し、その課題に取り組む中で、Ａの考えや思いを引き出す機会を増やし、表現力を育む。

イ　支援の手だて

（ア）日常生活の中から実態を把握し、Ａに課題を認識させる。

（イ）課題を改善する意識・目標を明確にさせる。
（ウ）課題の改善に向け、寄宿舎生Ｂ（高等部普通科２年生）とのマッチングを試み、話し合う場を設ける。
（エ）振り返る機会を作り、目標達成につながる意識付けを行う。

ウ　支援の実際

（ア）１学期

支援	変容
・日課の中での忘れ物の回数をそれぞれ数値化し、その時期や傾向と合わせて伝える。 ・「忘れ物を減らす。」をテーマにＢと話し合う機会を設ける。 ・共通の課題を持っていることを理解させ、協力し合って改善しようとする意識を持たせる。 ・月１回、振り返る機会を設け、より良い方法を模索する。	・「忘れ物が多い気がする。」という漠然とした認識が明確になり、減らしたいという意欲につながった。 ・２名で取り組み、お互いに同様の課題を持っていることが分かり、緊張感が和らぎ、Ｂと持ち物を確認し合うことが増えた。 ・自身の記憶力や従来の方法だけで忘れ物を減らすのは難しいと感じ「２学期から新しい方法を取り入れてみてはどうか？」という寄宿舎指導員の提案を快く受け入れた。

お互いに忘れ物を確認し合うことから、日常のコミュニケーションへとつながり、寄宿舎生同士での談笑や立ち話をする姿が増えた。しかし、忘れ物が減る傾向は見られず、準備期間が数日空いたときや、いつもと違う行動をしたときに忘れ物が多い傾向にあることが分かった。友達や寄宿舎指導員とのコミュニケーションによって、忘れ物を思い出すこともあれば、気がそれて忘れてしまったこともあったと思う。

１学期末には、忘れ物の増加に加え、グループ学習会の時間を忘れることがあった。改善方法を模索するためＡとの対話を重ねる中で、一度に大幅な改善を計ることは難しく、具体的な方策を工夫し、少しずつ改善しようとする意識に変化した。

（イ）２、３学期

支援	変容
・スマートフォンの情報管理アプリ(メモ・リマインダー・カレンダー)を利用したグループ学習を行う。 ・月１回、振り返る機会を設け、より良い方法を模索する。 ・各々の意志を尊重した取り組み方法を取	・音声入力や自動通知などには、苦手意識があったが、Ｂと楽しみながら取り組む姿が見られた。 ・持ち物の確認をしたり、登校の途中で気付いて取りに戻ったりする回数が増えた。明らかな意識の変化はあったが、忘れ物の回数に反映されるほどではなかった。 ・リマインダー機能の読み上げの音声が

り入れる。	好みではないとの申し出があり、学校で行っている点字メモを今後の方法として取り入れることにした。その結果、学習に関する忘れ物(宿題や教科書)の割合が減った。それでも、まだ自分が感じている以上に忘れ物の回数が多いと感じていた。

エ　成果及び課題

忘れ物の回数を数値化することにより、忘れ物が多いという自覚を持ち、「今よりも回数を減らしていきたい。」という目標を持つことができた。また、自分を見つめ直すことで実現可能な意識を持ち「少しずつ可能な範囲で減らしていこう。」や「念のために、もう一度持ち物を確認しておこう。」と言うようになった。持ち物の確認をする機会が増え、それに比例して途中で気付く回数も増えた。

寄宿舎指導員の提案したリマインダー機能に対し、自分の意思表示をした上で、点字メモという代替の方法を提案するなど課題の改善に対しての主体性が見られた。その結果、自分が選択した取組に対し「一定の成果があったように思う。」という意見が聞かれた。

持ち物の確認への意識は高まったが、全体の忘れ物の回数には反映されていなかった。定期的な取組方法の見直しを行い、根気強く関わっていく支援の継続が必要であると感じた。

今回、２人で課題に取り組むことで、日常の生活でもＢ以外の寄宿舎生や寄宿舎指導員とのコミュニケーションが増えた。さらに、自分自身を振り返る機会を設けることは、Ａにとって、課題を明らかにし日常の意識を改善していく上では効果的であることが分かった。自分の欠点を指摘されるとＡの年代では、方法を間違えると反発や反抗につながることもあるが、アドバイスを受入れ、改善しようとする素直さや前向きさが見られた。また、コミュニケーションの話題として共通の課題を選んだことで、Ｂや寄宿舎指導員に対して思っていることを伝えるなど、言動に自信のないＡにとっては、自己肯定感の向上にもつながった。

（２）令和４年度（Ａ：中学部２年次）

ア　ねらい

Ａが自分自身で日常の課題を挙げ、その中から取り組む内容を選択し、Ａの意見や感想の発言の場を設け、主体的な言動に自信を持つ。

イ　支援の手だて

（ア）５月から毎月１回の学習会を実施し、卒業後に生かせるスキルをディスカッションやロールプレイ、ゲーム形式などを用いてグループ学習する。

（イ）成人生徒２名から、現在に至る自己の体験や社会経験を聞き、卒業までに身に付けたいことについて考える機会を作る。

（ウ）寄宿舎生活の中で自己課題を見付け、改善する意識を持って生活するよう支援する。

ウ　支援の実際

グループは、昨年度のメンバーに新入舎生１名（高等部普通科１年生）が加入し、３名で取り組んだ。

（ア）５月の学習会

進学や就職した際の生活をイメージし、その時に身に付けておいた方が良い知識、技術について他の寄宿舎生と一緒に考えた。「自分の良いところの見付け方」「初めて会う人とのコミュニケーション」などの意見が出た。そのため、昨年度よりも、よりコミュニケーションスキルに重点を置き、研修を進めることを相談して決めた。

（イ）６月の学習会

５月の学習会でＡから出た「自分の良いところの見付け方」をテーマとして行った。理由として、Ａの意見を尊重したことと、取り組んでいく中での意識の変化を知るためである。

最初に自分の「長所・得意なこと・短所」を書き出すゲームを実施した。

長所・得意なこと	短　所
・点字を書くのが早い ・走るのが得意 ・機械を触るのが比較的上手	・キレやすい

その後、探し方について、説明を行った。具体的には、「自分の短所を書き出す。」「得意なことを書き出す。」「家族や友達など身近な人に聞く。」「褒められたことを思い返す。」「自己肯定感を高める。」などの方法である。

（ウ）７月の学習会

６月の復習をゲーム形式で行った。そして「初対面での適切な話題」をテーマに、避けた方が良い話題や、会話を無理なく続けるこつを説明し、「自分から話し掛けて、会話の広げ方を身に付けよう。」と伝えた。

（エ）９月の学習会

成人生徒からの話を聞く学習会を２度に分けて実施した。主に働いていた頃の話と挨拶の大切さを伝える内容だった。Ａと比較的年齢が近い成人生徒の学習会では、様々な質問が出た。Ａが「身長を伸ばすためには？」と聞くと、栄養バランスや食事の大切さについてのアドバイスを受けた。その後は苦手な物も努力して食べる姿が見られた。

（オ）10月の学習会

９月の学習会を振り返り、特に二人が大切と話していた「挨拶」についての学習会を行った。挨拶をする具体的な場面をゲーム形式で考えた。また、お辞儀の角度や姿勢についても説明した。寄宿舎指導員の肩と腰に手を置いて、「先言後礼」を実施し、その姿勢を感じ取るようにした。

（カ）11月の学習会

普段の生活の中で友達や寄宿舎指導員に対し、遠慮して依頼できない場面が何度か見られたため「上手に人を頼る方法」～人に任せられるようになろう！～というテーマで学習会を行った。他人を頼ることとは、相手への信頼、承認、尊敬を伝えることであり、適切な支援を依頼することで、相手との良好な関係を築くことができることを説明した。

ロールプレイ内容
複数の寄宿舎指導員に、点字で名前を記入してもらう。誕生日を尋ねる。

ゲーム感覚で取り組みながらも、寄宿舎指導員に対して、言葉を選びながら丁寧な口調で話した。

（キ）12月、１月の学習会

１年間学習してきた内容のまとめを行い、自分が変わったところや寄宿舎生活で定着したことなどを発表した。

発表内容
・挨拶を明るく言えるようになった。挨拶をする際に、きちんと礼ができるようになった。 ・食事のバランスを考えるようになった。苦手な春菊や干しブドウ、椎茸も食べるチャレンジをしている。

その後、６月に実施した「自分の良いところの見付け方」の復習を行い、再度、「自分の長所・得意なこと」を書き出した。

６月に実施した学習会の「長所・得意なこと」を１月の結果と比較した。

６月の学習会	１月の学習会
・点字を書くのが早い ・走るのが得意 ・機械を触るのが比較的上手	・運動が得意 ・明るい ・挨拶ができる ・真面目 ・後回しにしない

長所・得意なことを比較すると、６月の３個から１月は５個に増加した。また、６月は自分の得意なことを主に書いていたが、得意なことの範囲から性格的なことまで、長所を捉える範囲が広がっていた。その中には、「挨拶ができる」のように他者との関わりを感じる長所も入っていた。

エ　成果と今後の課題

年間を通じて、毎月１回の学習会を実施してきた。学習会直後には、Ａの意識も高く、取り組んだことについて話を聞くと、内容についてもよく覚えていた。しかし、生活の中で実践し、取組を継続するのは難しかった。日々、卒業後の生活を少しずつイメージしながら、今、何が必要なのかということを会話や言葉掛けを通じて、意識することが重要だと思った。ただ変容が大きく感じられたのは９月の学習会の後だった。自分の意見を述べるのが苦手なＡが、成人生徒に具体的な質問をした。その際、丁寧な返答を受けたことで、生活の中でも、寄宿舎指導員や成人生徒に疑問に思ったことや考えを伝えることが増えた。

10月の学習会後には、成人生徒に浴室が空いたことを伝えるため部屋を訪問した際、ドアをノックしてから内容を伝えるまで、学習会で学んだことを実践していた。その様子を見て、「とても良かった。」などと言葉掛けを行った。このときのように、寄宿舎生活の中で実践できた場面を捉え、その都度、言葉掛けをし、他人が言動を認めることが自信へとつながり、有効であると感じた。

４　まとめ

令和３年度は、Ａの発達段階に配慮し、また、Ａに自信を持たせたり、主体性を引き出したりするために、意思を尊重する支援に心掛けた。その結果、スマートフォンで音楽鑑賞をしたりゲーム機で遊んだり、一人で過ごす時間が多かったＡが、寄宿舎内でコミュニケーションを取りやすい雰囲気となり、自分から関わろうとする言動が増えた。その中で、何気ない日常の関わりから相手との信頼関係を築いておくことも、コミュニケーションスキルの向上に関わる要素だと感じた。

令和４年度は、前年度からの取組の成果を基に、コミュニケーションスキルを話題に出し、ロールプレイングしたことで、それを意識するようになった。

９月の成人生徒からの話を聞いたときのように、学習会においては、寄宿舎指導員の言葉にも耳を傾けてはいたが、年の近い先輩とのディスカッションでは、より興味深く聞いたり、共感したりしていた。その後のＡの行動でも、意識の変化が顕著に分かるほどの変容があった。その姿には、感心させられるばかりだった。

県下で唯一の盲学校にある寄宿舎は、成人生徒が一緒に暮らしているという特徴を持っている。Ａと成人生徒と一緒に生活することで、お互いに生活リズムや価値観の違いはあるが、コミュニケーションが円滑に行われると、会話が弾んだり、同級生などとは違った知識などが得られたりするなどのメリットもある。また、卒業後の自立と社会参加を考えてみると、就職した直後は、仕事で関わる周囲のほとんどの人が年上の人であり、コミュニケーションスキルのトレーニングとしても有効であると考える。

今後も、生徒の実態に合わせた支援の方法を見いだし、卒業後の様々な場面に対応できるコミュニケーションスキルが身に付くよう、日々の支援の充実を図っていきたい。

【参考文献】

北條久美子・伊庭正康（2022）「最新ビジネスマナーの基本」　新星出版社